

それを囲んでいた塀がみつかりました。平城宮では「式部省」が位置する場所ですが、藤原宮ではどんな役所があったのか、今後、出土した遺物を整理しながら考えてみたいと思います。

また、このあたりは、弥生時代以降には人が住みついた形跡があり、とくに古墳時代の5世紀以降になると生活の痕跡がよく残っています。出土した土器に韓半島のものに似た「韓式土器」があったので、渡来人のムラだったのかもしれない。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「遺跡保存整備課程」

11月23日から12月12日の日程で表記の研修をおこないました。参加者は例年よりすこし少なめの12名でした。この課程は、遺跡を整備するときに必要な基本的な考え方から、設計・積算にいたる専門的な知識・技術の習得を目的としています。遺跡（そこから）発掘（何が判り）整備計画（それをどのように）整備施工（して）管理・活用（人に判ってもらうのか）を旨とした研修内容です。講義内容は、遺跡整備関連諸分野と整備事例です。設計実習は、各自が地域で抱える遺跡整備の課題を持参し、受講の成果を踏まえ、参考図書にあたりながら自ら考え、独創的な図面として具現していく作業です。「久々に充実した1カ月だった」との研修生の感想文には、講師陣もとても勇気づけられました。



設計実習風景

発掘技術者研修「遺跡地図情報課程」

今年度の「遺跡地図情報課程」は12月18日から12月21日におこないました。短期の研修は、研修計画作成の時に、長期の研修の隙間に割り当てられるため、どうしても研修生や講師が集まりにくい時

期になる傾向があるように思われます。この研修は未だ特殊な分野であり、講師を求めるとなると特定の人物に依頼するほかないという状況です。そのため、日程の調整がむずかしく、概説から始めて各論を順に展開しにくい状況となっています。本年もこの点について研修生から不満の声があがりました。この不満は十分に予測できたので、研修の流れとGIS分野の関係について研修当初に説明をおこなったものの、理解が及ばないむきがあったようです。実習をおこなってほしいという要求も、機器・ソフトのレンタル費用や電源設備を考えると実現が困難な課題でもあります。

さて、そういった問題点はあるものの、最新の計測技術や標準化動向とともに、具体的な研究への応用例を学ぶことができ、多くの研修生が充実した研修期間を過ごしたことも事実です。帰郷した彼らが、行政での導入が急速に進展しているGISを、これからの文化財行政・研究に正しく活用されることを願っています。

発掘技術者研修「報告書作成課程」

1月16日から1月25日まで、表記の研修をおこないました。この研修は、毎年希望者が多く、受講者決定に四苦八苦していますが、今年も定員を越える応募がありました。時期的に年度末をひかえ、各自治体において、報告書の刊行が間近に迫っていることもあります。大学等においても、体系的に本作りの話を聞く機会がほとんどないことも関係しているようです。結局、文字通り、北は北海道から南は沖縄まで、通いの人を含め、定員を6名越えた30名の受講生が参加することになりました。

カリキュラムは、これまでと同様、“読みやすい”“わかりやすい”をモットーに、報告書作成の理念的な面から始まり、レイアウト・編集、製版・印刷という報告書作成の流れのなかで必要な知識・技術を身に付けてもらおうというもの。毎年のことではありますが、受講生にとっては、日頃、あまり目にすることのない印刷現場を見学したり、耳にすることの少ない現場の苦労話が聞けたことはよかったとの声があがっていました。

発掘技術者研修「遺跡環境調査課程」

今年度の「遺跡環境調査課程」は、1月31日から

2月14日までの15日間をもって無事、終了しました。この研修は通称、環境考古学研修と呼ばれ、奈文研の専門研修の中でもっとも古い研修の一つです。数年前は3週間以上をかけて多岐にわたる講義内容を盛り込んでいましたが、いずこも出張旅費の削減のせい、研修参加者が減ったため、最近では研修期間を2週間に短縮して参加増を期待しているところです。今回は定員を1名オーバーする17名の研修でした。

この研修の特色の一つは、外部講師が13名と多く、その分野も地質、植物、動物と広いことで、受講する側もたいへんだっただろうと思われます。しかし、感想文を見る限りでは、この研修が有意義であり、現場で応用していきたいという意見が大半でした。

一方、2回の経験交流会に担当職員以外の奈文研からの参加者がほとんどなかったことが残念という感想もありました。（埋蔵文化財センター）

▲ 速報展示「キトラ古墳壁画」

飛鳥資料館では、昨年の秋に藤原宮跡から出土した木簡の速報展（実物展示）をおこないました。それに続いて、今回2002年2月26日から3月24日までの期間で、昨年12月のキトラ古墳予備調査の際に撮影した画像の写真パネル展をおこないました。

この調査は文化庁が、キトラ古墳壁画保存のために実施したもので、文化財研究所が協力しています。

キトラ古墳については、2001年3月までに明日香村が学術調査をおこない、壁画の保存状態が大変悪いこと、崩落の危険性が極めて高いことが確認されていました。今回の予備調査は、こうした成果を受け、壁画の崩落を防止し保存処理を施すために、実際に石槨の内部へ人が入ることができるかどうかのデータを得ようとしたものです。したがって、撮影も南壁と盗掘坑のできるだけ正確な大きさを測ることに主な狙いを定めています。

しかし、挿入したカメラの位置や角度がこれまでの調査とは微妙に違っていたこともあり、いくつかの新しい画像を得ることができました。例えば、南壁の朱雀、西壁の白虎、東壁下方の人物像らしい像などは、より正面に近い角度から撮影ができ、全体の形がよくわかるようになりました。特に、人物像らしい像は、これによって顔が獣面とわかり、十二



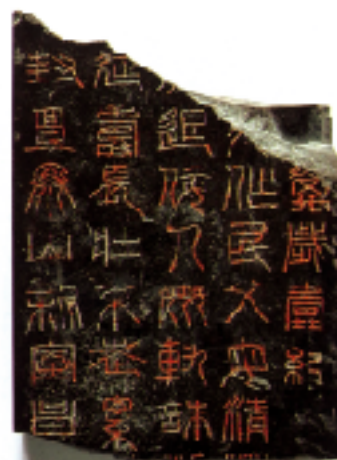
東壁獣面人身像

支像の可能性が高くなりました。

飛鳥資料館では、新聞やテレビなどの報道機関を通じて広く一般に知られることになったキトラ古墳の壁画を、少しでも多くの方々に見ていただければとの思いから、この度、速報展示というかたちでの公開となりました。（飛鳥資料館）

▲ 社会科学院考古研究所との共同研究

昨年8月、奈文研が中国社会科学院考古研究所との間で友好共同研究議定書を調印したことはすでにお伝えしたところです。その一環として、このほど劉慶柱所長以下5名の研究者が共同研究のために来日されました。一行は共同研究のあと、所内の新鋭施設や各地の遺跡・博物館などを見学し、3月15日に成田国際空港から帰国の途に就きました。



漢長安城出土玉牒